幕末期の女性公益土木事業家千林尼の事跡について

山口大学　正員　○田村洋一
山口県技術士会　　山崎信雄

１．はじめに

江戸末期の山口県旧厚狭郡を中心に道路改修、架橋などの公益事業を実行した尼僧千林の事跡について報告する。なお、ここに紹介する内容は、土木学会中国支部「ちゅうごく土木みらい委員会」の委託を受けて平成７年度に実施した山口県の歴史的土木構造物保全調査および同委員会平成８年度自主研究の一部を要約したものである。

２．千林尼の来歴

千林尼は山口県吉敷郡床波字大沢(現在：宇部市)の農民権右衛門の娘として生まれた。権右衛門に男子はなく、三人娘の次女であった。幼名を千代とする郷土史家もあるが、本名、生年は定かでない。

16歳で近所の幸右衛門に嫁いだが、夫の身持ちが悪くついにその家を去った。結婚に破れた千林は、諸国を巡礼する六十六部の僧との出会いにより仏門に入る機会を得た。また、尾張で禅学を修行したともいわれている。その後、常盤池本土手付近の庵に居住したが安政 2 年(1857)に当時厚狭郡の中心地であった舟木の瑞松庵の末寺逢坂観音堂に移った。千林の事業はこれより没するまでの 10 余年の間に行われたものである。晩年は、厚狭町字吉部田の玉泉庵に住み、明治２年(1869)に 60 歳(推定)で死去した。

千林尼 50 年忌の大正６年(1917)にその法要が営まれ、翌年、地元の人々によって千林が埋葬された玉泉庵跡地に墓が建立された。さらに、昭和 10 年(1935)には瑞松庵山門前に千林尼の顕彰碑が建立された。

なお、千林尼の事跡が公式文書に現れるのは大正 15 年(1928)に刊行された厚狭郡史にその道路改修事業が記載されたのが最初である。千林尼に関する調査は、小林勇八の古老からの聴聞によって端緒が開かれ、長谷川卒助によって関係事物が確認、詳細にされたものである。その他、郷土史家を中心に尼の足跡が記述されているが、多くはこの二人の調査結果の再紹介に止まっている。

３．千林尼の土木関係事跡

記録に残る千林尼の事跡を以下要約的に示す。

①逢坂の石畳

楠町(旧舟木)と山陽町の境となる西見峠のふもとの小集落に千林尼が堂主をつとめた逢坂観音堂があり、この辺りから西見峠にかけての本往還(旧山陽道)を改修したのが逢坂の石畳である。工事延長 350 間(630m)は尼の石畳敷設事業中最大規模で、慶応年間に約２年の歳月を要して竣工した。しかし、明治 16 年(1883)の国道改修、路線変更に伴い大部分の敷石がはぎ取られて工事の石垣用材に転用されたため、現在はわずか一部(幅約 1.5m、長さ約６m)が集落内道路の未舗装部分として残されているにすぎない。

②棚井山田道の石畳

藩政時代においては、道祖峠を越えて厚東棚井と舟木を結ぶ棚井山田道は舟木から瀬戸内海側に通じる幹線で、舟木に集積された米が厚東川河口の港(棚井塚)に運送されていた。

千林尼による棚井山田道の改修は慶応年間のことで、舟木側、棚井側に各３段、総延長 325 間(585m)の石畳が敷設されたといわれている。現在、この内の５カ所の石畳が発見・保存されており、その概要は以下のとおりである。

第１石畳：延長約 25 mで、この部分は比較的平坦である。敷石の大きさは大小 30～50cm で、加工の形跡は認められず、自然石の平たい部分を上にして敷設されている。

第２石畳：第１石畳から約 400 m進んだ地点に第２石畳がある。この部分の石畳の残存箇所はわずかで 10 mに満たず、敷石もまばらである。

第３石畳：第２石畳からお駒堤を経て約 500 m進み道が上りにさしかかる付近に第３石畳がある。石畳の延長は約 50 mで敷石の保存状態も良好であるが、その終端付近は路面が洗堀されている。

第４石畳：第３石畳と約 150 mの距離をおいて第４石畳がある。残存長さは 20 m程度で、始点部で路面が大きく洗堀されているが、５つの石畳中最も堅固に敷設されている。その前後には、大石に小石を積んだ道祖神と大石に松が食い込む形の道祖神が祀ら

れている。

ここ過ぎると道は座頭ころびと呼ばれる難所にかかる。この隘路は長くはないが、洗堀や倒木による傷みが激しい。この坂を上りきったところが道祖峠の頂上で宇部市と楠町との境界である。

第５石畳：峠から約 400 m下ると第５の石畳がある。これは舟木(楠町)側に残る唯一の石畳であり、その延長約 95 mは棚井山田道に残存する石畳の中では最も延長が長くまた、敷設状況もしかっりしている。

残存する石畳総延長は約 193 mで、これは建設当時の約３割である。また、棚井、山田の両側に各３段の石畳が敷設されたことからすれば、山田側で２段の石畳が不足している。また、棚井側では２段多いことになるが、距離、地形などからみて、第３、第４の石畳が連続していたことも考えられる。

③指月道の石畳

指月道は小野田の有帆大休から指月峠を越えて舟木に至る脇街道で、当時は多くの通行があった。この道は、粘土質のため雨や湧水でぬかるみ人馬が難渋していた。指月道の石畳は、この道の峠の部分を改修したものである。

敷石の延長は 150 間(270 m)で文久２年(1862)に完成した。現在道は廃道となり、大休側の石畳が一部残っているのみで、峠以降の道は林になって消滅している。石畳改修工事が完了したとき、千林尼が峠の頂上付近に建立した寄付人功徳の石地蔵が、明治 17 年(1884)に舟木来迎寺の山門前に移設されている。石畳の完成時期が明確なのはこの石地蔵に年号が刻まれているためである。

④鏡ヶ窪の敷石

敷設された敷石の規模は幅３尺(0.9m)、長さ 20 間(36 m)であったといわれているが実在しない。

⑤吉部田の石橋

厚狭町吉部田から大黒渡しに出る間に架けられた小石橋である。文献によっては現存すると記されているが、確認するに至っていない。

⑥道の付け替え

吉部田から津布田に出る道の付け替えを行ったといわれているが詳細は明らかでない。

⑦船越の石畳

地下の伝承によれば、吉部田から高千穂村に出る道の船越に石畳を敷設したといわれているが、廃道になり山林中に没してしまっている。

⑧厚狭川の反り橋架設

厚狭川下津に長さ 24 間(43.2m)の橋脚のない反り橋を架設した。しかし、完成間近に洪水のため流失してしまった。この橋は、当時舟木の有帆川に架かっていた反り橋(布目橋)を模倣したものといわれている。しかし厚狭川の川幅は布目橋に倍するもので、無橋脚反り橋の架設には無理があったと思われる。この厚狭川下津の架橋工事が千林の最晩年の事業であり、再度の架橋を計画しつつ病を得て死去した。

厚狭川沿いの日本化薬厚狭工場下手に千林尼が溺死者を供養した石地蔵(復元)が安置されている。架橋はこのような被害から人々を救うために事業化されたと考えられる。

⑨その他

西岐波村の南方八幡宮に石造りの経蔵を寄進したといわれている。しかし、この経蔵は明治初年の神仏分離の際に尼僧の寄進によるものは不吉との理由で跡形もなく破壊されてしまったとのことである。今回、その経蔵に関し神社を訪問調査したが全く記録はないとのことであった。また、床波村に小石橋を架設したという伝承が残っている。

４．おわりに

千林尼は大柄で、常に粗衣をまとい毀誉褒貶を意にかけず、地下では男おびい(おびい：尼僧の方言)と呼ばれた。義侠心に富み、貧困者の世話をし、寒夜に自らの衣類を脱いで人に施す行状が多々あったという。托鉢と仏の供養により浄財を集め、諸事業の資金としたが、尼に対する近隣の若者の人気は高く、供養の際には寺の縁に架け出しをするほど賑わったという。一方、慶応元年(1865)には雲水数十人を集めて法華千部法要を営み堂主としての力量もみせている。晩年、厚狭川の橋が流失した際、工事請負人との間に揉め事が生じ乱暴な男に蝋燭立てで胸を突かれ傷害を負ったのがもとで病床につき、再度の架橋の意欲を残しつつ生涯を閉じた。

千林尼の石畳で道として残存しているのは棚井山田道のみである。これまで地区住民により維持保全がなされてきたが、洗堀、崩壊が進行しており、このままでは廃道化する恐れもある。地域の歴史を温ねる道、自然とふれあう散策道として、速やかな公的補修・保全対策の実施が望まれる。